

<研究会報告>

社会科教育の今日的課題

岩崎 宏之*

リクルート事件による日本の政治の混迷状態の中で、教育現場ではどの様にこの事態と問題を受け止め、子どもたちに説明するのか。これはまさに日本の社会科教育の抱える今日的課題といえるだろう。

戦後の幾たびかの内閣交替のあと、新内閣に対して期待感を持ち得たこともあったが、この度の宇野新内閣の発足に対しては多くのものが期待を持ち得ず、事態の進展をあきらめにも似た気持ちでみているようである。

世の中が泰平であるのか、政治への不信がこれだけ叫ばれ、また深いところから出ているにもかかわらず、大衆運動としての抗議が盛り上がらないのはなぜだろうか。日本の国民が紳士になったのか、あるいは従順になったのか、政治に関心を持っているのだろうかと思いを巡らせている。

社会科教育の目的は人格の形成にあり、良き市民として成長するための基礎をつくることにあるのではないだろうか。そしてまた、良き市民とはおとなしい国民をつくるということではないはずである。臨教審が目指すところの教育改革の意義は、今日の国際化とそれへの対応、情報化社会への対応、多様な個性の尊重にあるというが、教育の原点に立った人格の形成というものを踏まえたものであるのかどうか信じがたいところがある。

選挙とはいったい何なのか、ということに対して深い洞察を持ちうる人たちを育成することが良き市民をつくることであり、社会科教育の目的であろう。社会科教育において、民主主義、議会主義を教えようとする中で、教育の内容と現実に進展している事態との間にどうしようもない大きなズレがある。それを、政治とはこういうものだとしてしまっただけでよいものかどうか。余りにも政治とはこういうものだという物わりの良さで済んでしまっただけでよいものかどうか。豊かになったことの中に、甘えではなく、甘やかしがあってはならないと思う。これが、この数日、私自身の自戒として考えさせられたことなのであります。

付記：なお、編集委員会が講演内容を要約しました。

* 筑波大学歴史・人類学系